

補陀洛山寺

補陀洛山寺は、白砂の浜の向こうに広がる太平洋に面して建てられた天台宗の寺院です。近年の都市開発で寺からの眺めは損なわれてしまいましたが、補陀洛山寺は今でも霊場としての熊野において山々と海を繋ぐ役割を果たし続けています。この寺は、熊野三山やより標高の高い場所に位置する寺社と同様、神仏習合の歴史を持ちます。

補陀洛山寺は、4世紀にインドから熊野にやってきたとされる行者、裸形によって開かれました。後に、この寺は補陀落渡海という風習で知られるようになりました。補陀落渡海は、慈悲の仏である観音菩薩が住まうはるか南方の浄土、補陀落にたどり着くことを祈願する僧が、わずかな食糧とともに一人で沖に漕ぎ出すという一種の殉教でした。

千手観音

補陀洛山寺にはこの寺の本尊である千手観音の木像が安置されています。高さ170センチほどのこの像は、平安時代（794-1185）に制作されましたが、より明るい色の木で作られた現在の後光は17世紀につけられたものです。千手観音像は年に3回、それぞれ1月27日、5月17日、7月10日に行われる法要の間だけ一般に公開されます。

多くの千手観音像と同様、この像にも一本ずつ彫られた腕が千本ついているわけではありません。身体の前にある四本（敬意を表す仕草として両手を合わせている二本と手で印を結んでいる二本）を除くと、手の数は両側に二十本ずつです。これらのそれぞれが二十五の世界を救うため、総計で千の世界を救うと言われています。また、この像には顔が三面あり、最もよく見える顔は穏やかな慈悲の表情を浮かべています。この像が多くの手に持っている道具や法具は、信奉者に代わって救世を行う観音の力を象徴しています。

また、この像の千手観音は三面の顔を持っています。二面は一部が隠れており、最も良く見える面は穏やかな慈悲の表情を浮かべています。千手観音像の多くは十一面の顔と四十二本の手を持っているため、この像の造形は仏教美術において珍しいものです。

熊野三所大神社と振分石

補陀洛山寺のそばには、熊野三所大神社と呼ばれる神社があります。もともと、この神社は浜の宮王子と呼ばれる王子社（熊野三山の御子神を祀った神社）で、補陀洛山寺と同様、海を望む景色の素晴らしさで讃えられていました。かつては一体の社寺複合施設だった補陀洛山寺と浜の宮王子は、19世紀後半に明治新政府の命令によって分離されました。

この神社の境内に立っている「振分石」と呼ばれる石柱は、熊野古道の三本の主要な参詣道の分岐点を示しています。